椿説弓張月　後編巻之四

椿說弓張月

後篇

四

鎮西八郎
爲朝外傳　椿說弓張月後篇卷之四

東都　曲亭主人編次

第廿三回

海岸孤客を慕ふ水晶花
池水三尊を現ぞ並頭蓮

當下爲朝は。爲頼。簓江。鬼夜叉等が自殺のさまを見て。太く後悔し。直に嶋君を刺殺して。後ざまに腹を切らんとおぼせしかば。いちばやくも稚き人は[illegible]りよし。腰なる刀を捥りもちて。吐嗟とこゑする折しもあれ。忽地瀬のかたより。ひとりの漁夫。船を驀直に艚著て。爲朝の船に乘移て。嶋君を抱きとりて。つりなくも呼れを。爲朝はなほ拂ひ退く刺んとし。とゞめてその人を見るに。これ別人にあらず。二郎の長女が從弟女の夫なる。四男五郎なりしかば。とかくおもひかけぞ。とぞうりに。左右なくは逼りあへず。汝いかにして。けがとゞにあれやあるく。早

椙山女學園大學圖書館

くも来けれと。同の人ハ。四男五郎答て。僕ハえてこれをしらず。その朝潮ハ嶋鰕が縛られて。彼淮時より船をおとし。彼処の岩陰にさらひつれ。雄とも知らば。年の齢三十ばかりなる女子と。十ばかりなる男の童の声して。その名を呼べく喚びけり。八郎御曹司。目今ハ嶋に船をよせたまひつ。故ありて季の小女児嶌君を刺殺し。その身も自害せんとするとて。いと急なりせば。行てとゞめ申し。といそがしられ。その声ハ耳の辺にありて。その人ハ影もなし。その為体いと怪しけれど。御曹司ときこえしなりしかバ。あだしもなくバ船をよせし。こゝに来てみれば。果して告れと言に違ざれども。何の故に悲しく此の嶋が根に来まして。愛子を殺し。又みづからも死んとは志まひしかれ。縁故をしらまほしと。いとゆかしといふ。為朝嘆息し。呀汝をよびられしものは頼簓江が幽魂なれば。彼ハ黄泉に赴くといふ也。

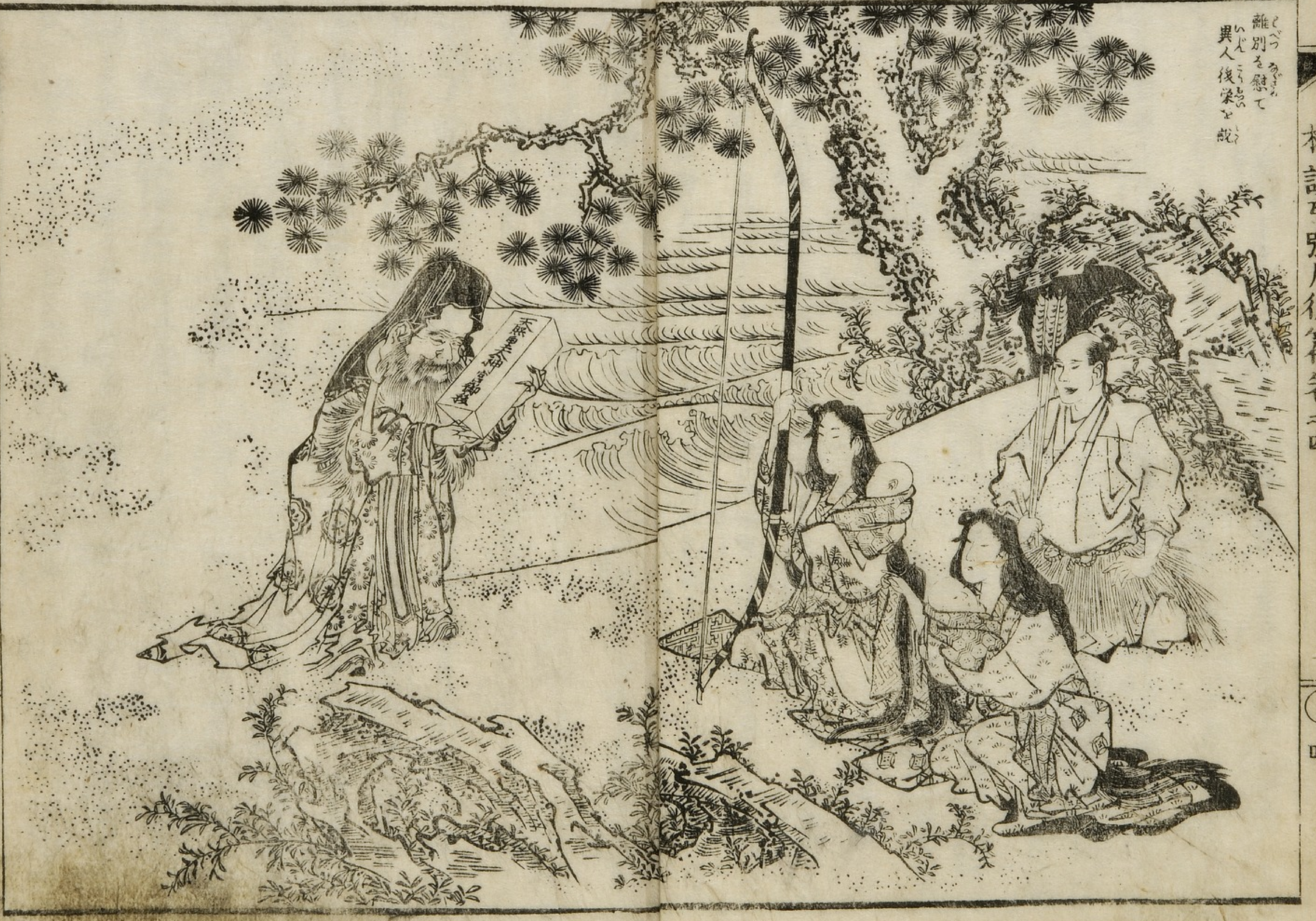
なほこれをおもふなれども。流れやと宜ひつゝ。哀悼気色にあらはし給ふ。かく言ふに看る君がおほせてかしこまりもとちは来らじ。けれバやゝ久しく如此なり。縦て箇様なるにかかりとて。忠重国府へ脱走り。茂光官軍を将て押よせ来るとし。鬼夜叉と簓江は。忠義の為に命を殞し。為頼まさ死を潔して。屍を野嶋の館に曝せしたり。審に説あかし。二通の遺書を読聞しなどなれば。四男五郎ぞさて毎に且感じ。且悼て。挟に袂を漏るゝなりけり。なほ潮垂る腰簑の膝に抱る嶋君も潸然と泣けれど。父の亡き跡を弔環のはなしまいらし候へども。その子とばかりぞ。又四男五郎に宣ふやう。何事もおもひあはせられ。稚子が殺されしも。鬼々しともいはれるが。鬼夜叉に賺されて。大嶋を脱と去りしが。先だて家隷を失ひ。朝敵と呼れ。身は何とよもに流されて。織に挙動をいはさかられ。既に期究されぞ。汝にものは

もこれかぎりなりけれ自害せバ。その首が伊豆の國府へ送りつかはし過分の賞禄を得て。洲人を賑せしと宣へバ。四男五郎ぞもあへど。その仰しも畏へざれ。マヅ洲人ハ御曹司を慕ひまゐらする事。嬰児の母を慕ふがごとし。加之太郎丸二郎丸も在さねバ。これ來りすまひたまふ。對面が許されど。忽地自害してハ人に望を喪し。何の益かあるべき。且國地へ通路なくして嶋にてよしや自殺したまふとも。誰か茂光とかくんに訴ふべき。されバ又無益なくてよからずや。すげなく忍死ひとゞまり。けつちやう嶋に住果て。稚子らの老前をも見まくほりし。そのこゝろハいとたがひになりぬるが。兄君も弟君も御曹司によく肖たまひねとて長女それに慰めもし。又數ゑをしても君のゝちが見まりし出ざる日もあらバ。誘の人本嶋へおん船をよせゆべきにとそこといふ。弟なれバ頭をうち掉。汝が諫言理あれに似られど。又流はじ罪の脱れ來で。阿容々と洲人に面をあはせんを恥るに堪ざらんあれ。汝がいふところも悲止がたけれバ。且く自殺をとゞまりて。この小嶋に想ひ死んとも活んともおもひ定めなんと宣へバ。四男五郎かしこまりて。さらば僕ものちの嶋に立かへり潜に長女に告まゐらして。稚君らを伴ひまゐらせ。ほどなく彼処にあがらせまへとて聽て船が引入まつ。為朝と嶋君が來りし磯にのぼし。その身ハ又小船に飛乘て本嶋へぞ漕去りねぞ。為朝ハおもひもかけざる自殺を四男五郎にとゞめられて黙々と楽しまで折しも荒磯に時ありがほなる卯の花の咲ありけれバ。いかなる年大嶋へ初る日に長女が携さへ別が惜てともまで送りきたりし彼が慰んとて。卯木をよりてそれを汝ぬらひこの嶋へ來るよあらバこの枝も又活とこあらんと誓ひしを。おもひ出れハ為朝が茂光ぬに背かえせ脱去てこゝへ來嶋なれバ。その卯の花を今ぞさかれ。前象にてありけれよし遊莫

懃に長女等に抑留せられてハ。父が志を遂がたし。とてもかくても死おくれし玉の緒を風にまかして讃岐国に押渡り。新院の陵にまゐりて。臣が孤忠を訴奏し。かしこけれど御廟を枕にして腹を切らんものをと。ひとりごちつゝ身を起しかく忙しく。舩に乗らんとしたまへば。嶋君これをみて。父上何地へ行まさば倶したまへと泣惑ひ。袖も露けき直垂に。はふりかゝりたまへば武士の猛きこゝろもよわりげにやさこそと掻寄て抱きあげ。げにといひ慰め。長女とふたり子どもらに逢でゆくさき恨みぞそふ。これをしも留めなば。我が身を後ざまにも彼にはいよ便なからん。母よ嶋君。父が死んとすでハ。御身をも伴ぞしともちゝしてとれそのもとりあへず。来れ長女等が恨もはれん数人かも。せめて像見を遺さんとて。馳返し弓に矢とり副て。家の挟間に倚かけおきて。嶋君が舟筈に扶乗して。東涛の磯を漕いだされ。渺々たる青海原が風の隨意にまかせて潮も引やら

ざりが。海神の憐みけん。矢が發ごとく走り帆の遂に迹なくなりにけり。有尤程に。長女とふたりの稚子とともに。小舩に乗りて。四男五郎に楫を取らし。その妻が将て東嶋に赴つ。皆々とともに磯方に登り。御曹司を何処ぞとて。彼此と尋探れども。その人を影もせざ。とみれハ巖が根に一張の弓と二條の征矢ありけり。とハ不審とおもふからに。ふたゝび汀渚に走り出。とみかうみれど。ゞが外に歟りなむちぞなりけれ。長女そこの景迹に。愀然として歎き。さてハ御曹司この嶋にも侍りあらぞ。こゝろほしくもや。何地へか脱去ましけん。それも夢ならざれや。変ならば見えじとして。君が面影みせよとて。砂の上に轉輾て。四男五郎夫婦も諫難て共に望を喪へり。且して四男五郎ハ件の弓矢を取て。長女が前にさし置けり。又慰めていひけれハ。御曹司ハ蓋世の義士にして。かゝるも敵の鋒先を避られ。漂泊したまへば。御身にえ逢えんとこそ面なくおはし。像見の弓矢

離別を慰て異人後栄を説



が遺しぬるこそかくまでもあらばいかゞはして本嶋へ誘引なされざりしに。いまさら悔ともその詮なし。りとの事がならば。洲人等も留め得ざりし。これをこそ恨むらめ。況て此弟の哀傷ハ。弟ひとつのみ人中もあらねば。終に父上の面影も認なまへれ太郎丸二郎丸の今こそあれ成長てハ朽をしくぞおぼさるべし。いひがひなきそちの弟なり。さらハあれ今生の縁し竭てハ。人力の及べきにあらねば。只その弓矢を彼君にとえりんせもして稚子たちに武勇を傳へまゐらし。世の頼そこのとおもで。大嶋ふく自害をし給ハれ。簓江の君ハさこそ御身が爹くれとて捨の中いかにありけんや。おもひまふ人の親として。その子がおもはざらんや。それがしも忠と義れたれ。摘て墓なく死られぞ。痛ましくもいと惜れ。是彼がおもひをしらずて。そのことハ歎れまさひそと言浩を竭して諫れバ。四男五郎が妻。又さまざまにいひこしらへ。夫婦ともに。太郎丸二郎丸を抱きあげつゝ。泣く長女を誘引て。船に乗まくといそぎしかれど長女ハ

卯木に手をかけつゝ。伏沈れ盡きもあかで涙の隙にいひけるは。世の中に生とし活るものゝ親の最期を悲ざらんや。過ける年のこの月に假初に別れしより浦ふく風の信だにあらで三年も夢と見え恩義に父を死なせしと。聞くゝ人あれて簓江の操濁らで潔き忠孝の名を大嶋の磯に藻屑となりぬる為頼君の孝行をいふにも得数なゝね。つゞ身ひとつを手向の給ふるもせで恕て死るで別るゝ悲さの。かれかさなるを察したまへ。親にとられ君に捨られ。立うしもなき永別松よりや千歳が孫とても忘るゝ隙のあるべきからうしハ武士の常なれど父ゝ魂のさまよふにならでなから名告もあへぞ神馬藻の。かゝげて外に過る共繋ぬ船のさまよふなれにとがれて直に死ねかしといはねばかりのうらを情像見も今ハ化なりと恨ミの限りかきて口説おぐひ遍りて物狂はしく。唯ても外れ磯に踏かゝて身を投んとしたりけるバ。四男五郎夫婦驚き膝なりの稚子をうち捨て

忙しく抱き留。道理を述て諫むる。舊の処へ引居れば。太郎丸二郎丸をなふそも笑ひてえ聞えねど。母の氣色の異なれば。苦音に泣て携ゆる長女はえる同もられ艸のよふ恩愛のなみうりせず。人ハかつらば死ざるに父の別且も生き母の歎えもとゝえて志りのうど胸めひがられ嶋猖の懐挾え添臥を。玉の床とおぼさかも。朝成夕成に潮風の吹ふ窈みられ乳房なれど。稚子のみなかへ余れ綱そらしも今より引放さバ。よも生育をゑのへじとおもひわれさへ痛ましく左右の腋にかきよせて。声が惜ぞ泣ふけれ。詰処ふ啄にめりなれ。松の梢に。一朶れ白雲靉靆とたな引つゞ化して兎との老翁となり。長女がほとりに立在が之見ほその形容。頭長くして身ふ半し。童顔白髪凡ならず。まさに一箇の大麻を捧りち。莞然と笑くひとれとれを善女かあふどしも怪しむことなかれこれハ原八郎為朝有縁のものにて。年来大嶋に往来し。影のごとくに附

そひて彼人を守れるなり。此度亦従ひて。四國へ渡らんとてこゝを過る節婦別離の悲歎に堪ずして。命を隕さんとすれるに忍びず。天機を洩らすのおそれハあれども。ころし立かへりて後来の吉事を告るなるぞ。汝も死べからず。なほ千辛万苦を厭ずして。ゆめさりれ稚児を守育よ。今より後十年が程ぞ。平氏滅亡して源氏一統の世となりてん。そのとき國地に赴て明白に訴なぞ。その胞兄弟の子孫嶋々に繁昌して。みづから安堵のおもひをなすべし。ちうれば慈母の績莫大にして。今死されなハ遂に勝まじ。哀苦に逼りて溝瀆に縊るゝハ匹夫匹婦のうへにこそあれ。為朝の側室なるハ似げなし。そも皇國乃宗廟天照皇太神ハ。万の民を慈ミたまふ事斜ならず。普天の下。率土の濱照らしあハざれ隈もなし。今より本嶋に勧請して。優婆明神と崇祀らば。大に蚕飼に幸あれのミならず。洲人一切の災害を禳ふべし。且某の年某の月

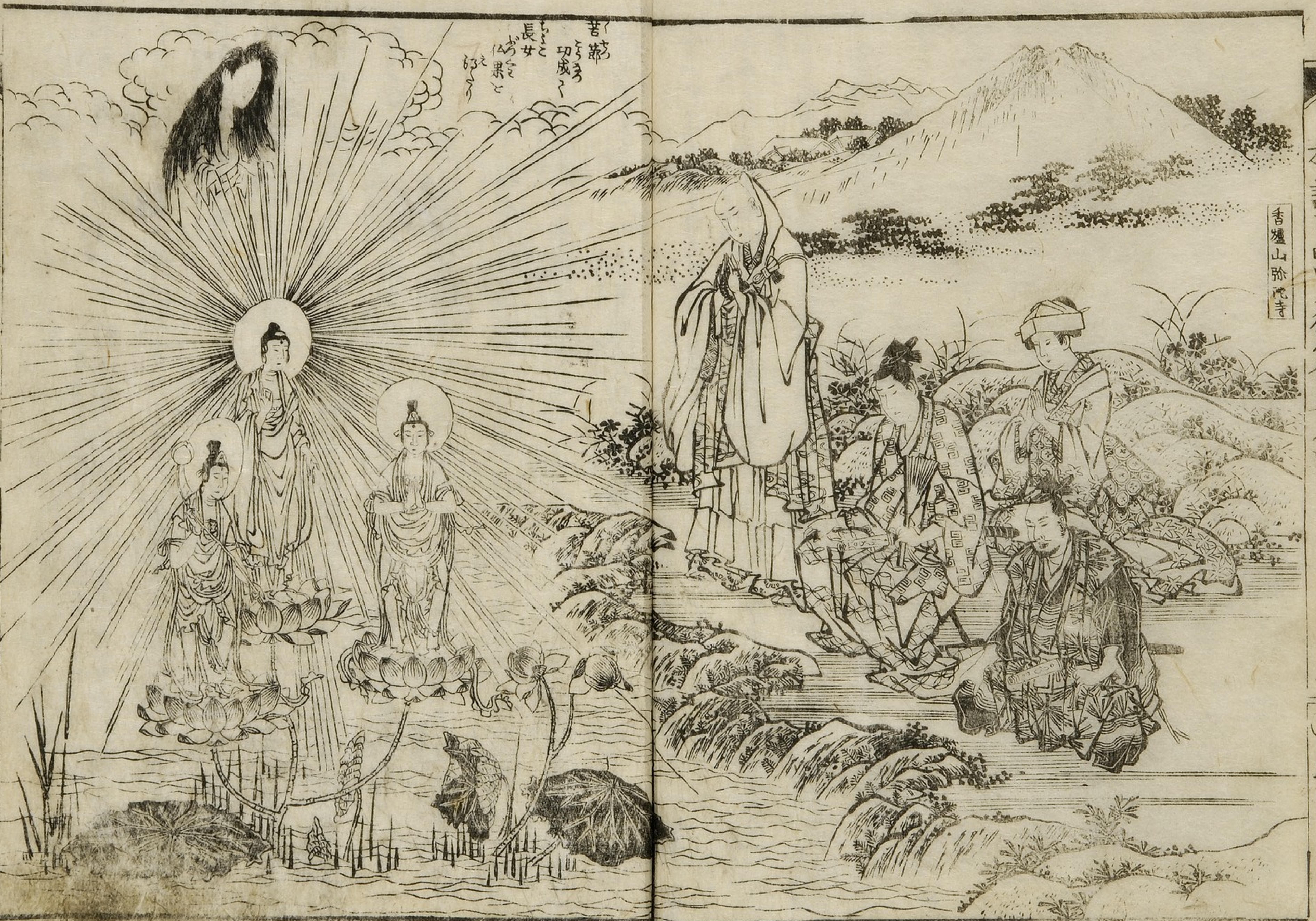
に至りて。きうちゆう嶋なる何がし山の麓の沼に。三莖並頭の蓮花忽然と生じて。弥陀三尊の影向するのありなん。これぞこの嶋に神道佛法の繁昌すべき禎祥なれ。そのとき二郎丸を出家さして。父祖の菩提を弔ふべし。然りといへども。爲朝の命運目今こゝに竭れにあらねど。但今生の對面ならぬ。その望を遂ざるのみ。されば像見の弓と箭を一社の神とし祝祀らば。彼人こゝに在すが如く。ながく子孫の護とならん。努々怠るなかれと說示して件の大麻が長女に遷らせしが。かくて銷ごとく失なりけり。長女をその示現によりて。猛に夢の覺たる心持し。四男五郎もその妻も。奇異のおもひをなしつゝあるのみにもあらず。掌して甚方を伏おがみ。さては後榮このしるしとて。皆愁の眉根を伸。遂にもちかう嶋に立かへりて。洲人ほかに縁由を告しらすれば。衆人皆みて爲朝のとくに留りますのぞみなれど。本意なくは思へれど。異人の示現に畏みて。いよ〳〵太郎丸

（るの人の德をそむていける時よりやしろを建てまつるこれを生祠と云）

二郎丸が敬ひ冊れ。おの〳〵力を戮して本嶋に生祠を修理ひ像見の弓箭を神體として。八郎明神と崇祀て。又本嶋に一社を建立し。天照皇太神を勸請ありく。者婆明神と神号しけり。この両社今なほ彼嶋にありとかや。かくて許多の年を經て。治承三年秋八月。爲朝の姪なりける前兵衛佐頼朝。蛭小嶋に義兵を擧。むかふところ勝ずといふことなく。文治元年三月下旬平族悉く西海の泡と消て源氏一統の世となりしかば。太郎丸二郎丸は鎌倉に赴て北條時政に就て爲朝の庶子なるよしを審に訴ければ。頼朝めでて對面有て。太郎丸には大嶋を管領さし。二郎丸へはちやう嶋を領せべしとよし御教書を賜て剰爲朝の節義勇敢その田横が風ありとて。賞嘆のあまり朝廷へ奏えあげて。爲朝勅免の事を執しやはれしかば。おほけなくも後高倉院の宮（或説後高倉院の宮云云いまだ不審）の御筆にて。八郎大明神とあそばしたる神号を銅板に鑄著新に

神影を鑄さし。これに甲冑を相副て賜られけるぞ。太郎丸二郎丸は欣然として朝恩を拝謝しまつり。これを故嶋に守りかへりて本社に安置し。長女四男五郎らに事の趣をつたへ志らしめたしかば。洲人等も傳きて大に歓び。すなはち篤信して嶋の鎮守と仰ぎたてまつれ。神徳日に灼然なりければ。後に鎌倉世々の将軍信仰あさからざりき。いづれの御時にか正一位を贈られ。今も正一位八郎大明神と稱す。さるにまたかくてければ程よ長女は宿望を遂て。かの月太郎丸二郎丸よりもろともなり。その身。むかし大嶋の御曹司に捨られまゐらせしとき既に死をえらびけるを。不思議の示現によりて。今まで存命ありしは。稚子らのかく發跡ん事を見まくほしければなり。今は世の中に。おもひ遺すこともなければ。只送域は御曹司の往方。今にしえずといへども。神體とこの嶋に鎮座ましませば。从が求るに及ばず。その菩節やうやくに切なりぬ。餘命をかしみ侍るべくもおぼえはべらぬぞ。

今は別を告てなん。足彼菩提の種として二郎丸を祝髪入道し。父祖の後世を吊ひまゐらせよ。勿論なり。願くは兄弟志をひとつにして。言行を慎み。洲人を憐みて。爹が名をけがしたまひそ。又四男五郎夫婦は。いよ／＼君たちの御護となりて。忠臣と喚れ。美名を子孫に傳へまくほし。申さんことは只これのことのみ。果ぬ。忙しく走り出れは。主従大に驚きて。とや喃らと喚どもかへりみせず。忽地行方しれずなりしが。詰旦嶋山の麓なる沼の中にて。その屍を獲たりしかば。主従いとく哀悼みて。山の半腹にこれを葬て。この日二郎丸祝髪入道あり。件の山に一宇の寺を建立せんとて既にその用意せり。しかるにいと不思議なりけるは長女身まかりて初七の旦彼沼に忽然と並頭の蓮花を生じ。花の中に弥陀三尊の影向ありしかば。光明赫奕とかがやきわたる。この奇瑞を見て太郎丸兄弟主従はいふもさらなり。洲人まで感涙を拭ひあへて合掌礼



香爐山弥陀寺

苦節ところ功成て ちきと長女が仏果を得たり

拝して。弥陀佛〳〵と稱ふる声。洋々乎として耳に満てり。時しもあれ。空中に花ふり音樂聞えて。弥陀観音勢至の三尊。長女を引接して水上をそなれ移りて山の頂に立給ふと見えし。紫雲に裹れ失給ふ。さるほどに。二郎丸入道を始め仏恩を感佩して。象教の廣大無偏なるを開悟し此度建立の道場を弥陀寺と稱し。山を香爐山と名づけ。為朝がめく分一世とし。その身は二世の住持となり。四男五郎がもて嶋の賞罰を管したまひしかば。州人これを押なべて入道の宮と稱し又四男五郎を太夫と呼びき。その仁政を稱讃せざるものなし。されば宮と太夫と主從にてながくそうちまう嶋を管領せしが。六世の孫雲加入道が時。嫡男稚宮が菩提の為に。康正二年丙子の冬十月。武藏國神奈川の宗福寺を請待して住持とせしより。寺号を更めて宗福寺と呼ぶとかや。是をけしくもなん。

太郎丸は伊豆の大嶋を管領して。大嶋太郎為家と名告り。後に為政と更む。これ大嶋の祖なりとぞ。かゝりしかば。保元の役に討死せられし為朝恩顧の郎黨。箭先拂須藤九郎。透間計悪七別當。手取与次。同与三郎。打手紀八。大矢新三郎。越矢源太。松浦二郎。左中次。吉田兵衛。以下。廿八騎の子孫この舊恩を忘れず。大嶋に集来て。為政に仕しかば。その家ます〳〵栄て子孫繁在しけり。これは後の物がたりなれども。その叙にすべてこゝに記せり。為政兄弟のことゞもの下に詳なり

第廿四回

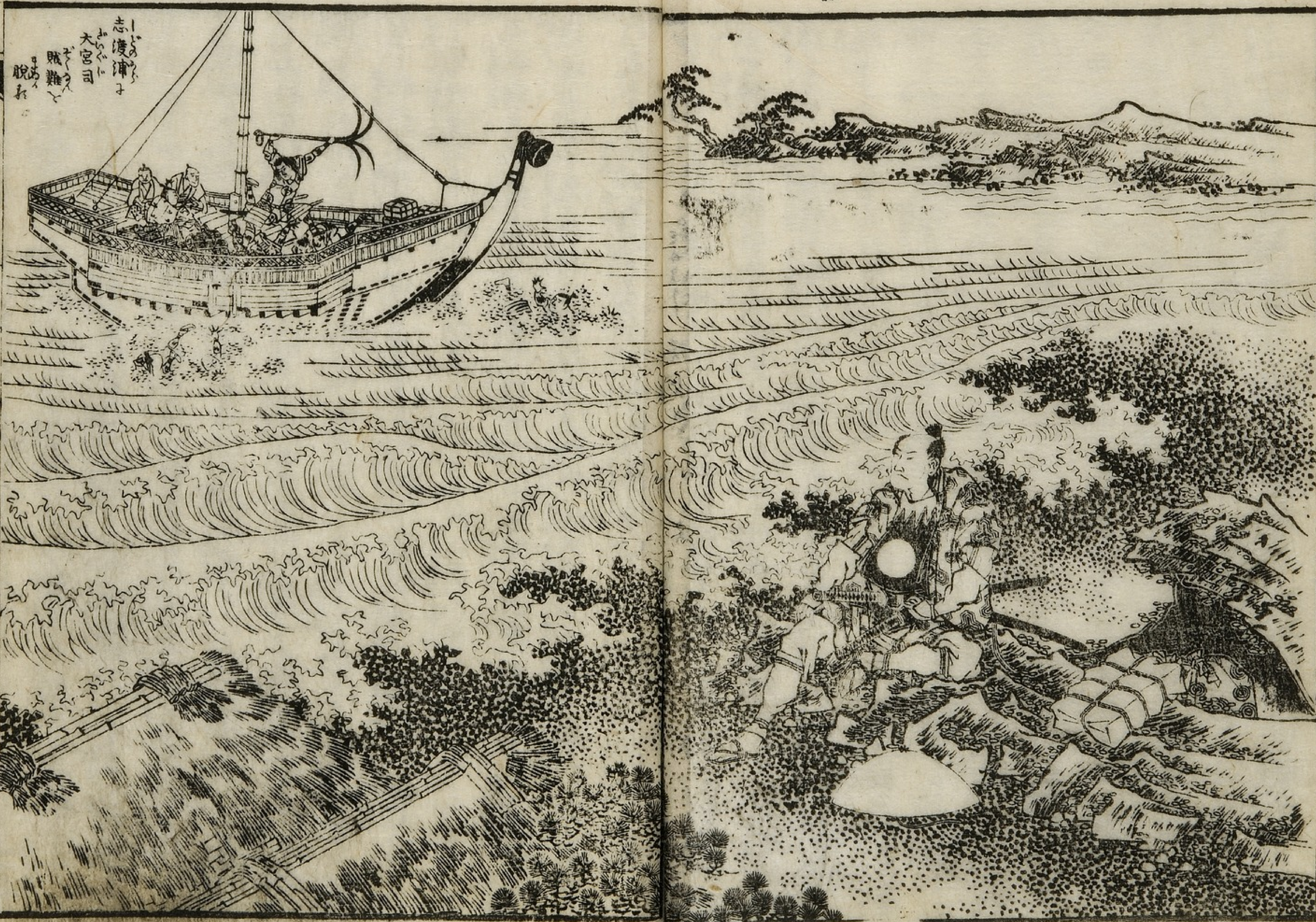
渦丸夜逢日の浦を閙す
嶋君潜に尾張路に赴く

却說八郎為朝は惜からぬ身の存命て。すゞろちうちまうも留らば。其憂愁に彼処にて自害せば。長女と子どもらが亡骸に團居して。しばらく泣に

ぞあらんずらん。さあれバ彼あれも物をおもはせ。さらバ後の世の障ともなりぬべし。とても妻孥に後れしものから。死ねバとて。百歩を恥る五十歩ふ駐れ。類ふとぞこそおもハせしに。潜ふ讃岐國ふ押つくらり新院の陵ふまうりく。とてもかくもなるらんとて。行を急遽けて青海原を風ふまかして出船の艫を斗。楫を操り。或ハ嶋君を懐ふかき抱て。千鳥の声よいく夜ゝ寐ざめ。或ハ人なき嶋根に歇りて。水を汲ミ薪を樵。百折千磨の艱苦を積ミて。その年れ秋のころ讃岐國多度郡逢日の浦ふぞ着きぬ。元来世を潜ぶ身ハしあれバ。左右なく陸ふのぼらで。折しも泊船の碇をおろして。主従十餘人なれど。翌ハ故郷へ纜を解とて。酒ありをびつゝ。その浦の景色を賞するありけり。為朝もそれふ少しさそれて。船を歇。夜も深れバ白峯へとおもむかんて准備をいそしめがら。音もせずひしかれふ。折しも夕汐満て。月ハ海よりさし昇り。

塩飽七嶋。直嶋。雌雄の嶋らは。氷の上に梅花の散られるがごとくに。ところどころふつらなりて。好景いふべうもあらねど。世ふあれ人の数ならず。年来荒磯ふ馴られぞ。めづらかならバぞ。かくてやゝ更闌て。彼処の船なれ主従もいたく酔ひしなりとおぼしくて。寂として声もせぞなりにけれバ。為朝ハ。ちづかに船をそのほとりにさし寄し。熟睡たる嶋君が寝顔を見してのたまふべし。割籠ふ飯を盛らく。通路の用意をなんしたりける。浩処ふ四國の浦〻を徘徊して。刼掠をもつて活計とする。蜘手の渦丸といふ癖者。夥の支黨をひきゐて。快船ふとり乗て。件の泊船ふ艚よせつ。おのく刀を引提て乱入りつ。汝ふ命惜くバ。路銀擔物を残りなく出せ。異議よおよバゞ水底ふ投入まくし。忽地魚鼈の食となさん。起よとのゝしりけり。船中の主従ハその声ふ驚覚て。こは得たりとて岸破と起。枕方なる刀か合て船館

のりに立塞り入ぜじと防ぎ戦へども。酒の酔いまだ醒ず。打太刀もしどろなるに。只劇騒ぐの三賊をほそく勢ひ猛く。群がれ羊に虎の蒐入る如く。嘯叫で砍てかゝれば。痍を蒙れるもの五六人に及びつ。その刀尖當るところもあらず。そが中に主人とおぼしくて。年の齢五十にちかく。文官にもあらで武士とも見えざる男。太刀を抜かざして防ぎ戦ひ。忽地小賊二人を砍て。水中に沈まし。遂に渦丸にわたりあひて。奮撃突戦劣らず勝らず。人雑もせず挑み闘ひしが。頼まれたる郎黨ハ過半痍を負て物の用にたゝず。彼人のばかりを勇しといへども。寡を衆に敵しがたく。吐嗟只今撃るべうみえけれ。これを見て為朝ハ。既に陸に上らんとて。船をそのほとりにさしよして在せしかバ。しかじとこそありつれ。事の為体を見るに忍びず。間七八艘が隔られし船の中へ閃りと飛で乗り移て。船中の人とるばよくおもひまへ。おのれ助太刀ぞと告もあへず。深山樫の三間鯱がいと軽らかに打ふりて。當るを幸に薙臥せ拂ひ倒し。縦横無礙に懸ちらしけるに。殘の小賊ホ。あるひハ首が打碎れ。或ハ向脛を打折られ。半ハ海に打おとされ。半ハ舷にへたばり臥て。脱るゝものハなかりけり。渦丸ハその猛威に辟易して。心の中に十二分の害怕を生じ。刀が引ぐ脱んとすれバ。彼男を逃さじと追ひ携て。為朝ハまた艫に立ふさがりて。前後より引挾みと声かけて。諸ともに打んとすれバ。渦丸も阿呀と叫もあへず。滑脱て身が跳らし。海へ丼と沈をしが。浪が滑でや脱ぬとにや。ほどちかくハ浮も揚らず。生死もしれずなりにけり。寔にかれ勇士の援にあらずバ。主従鏖にせらるべかりしを。九死を出て一生を得たりとて。主人猶さらに稱讃して。篤く為朝に欽び笑えがかく上坐に請じれバ。為朝あへなく坐に著ものから。これハ故あつて。世に憚るもの



志渡浦に大宮司賊難を脱る

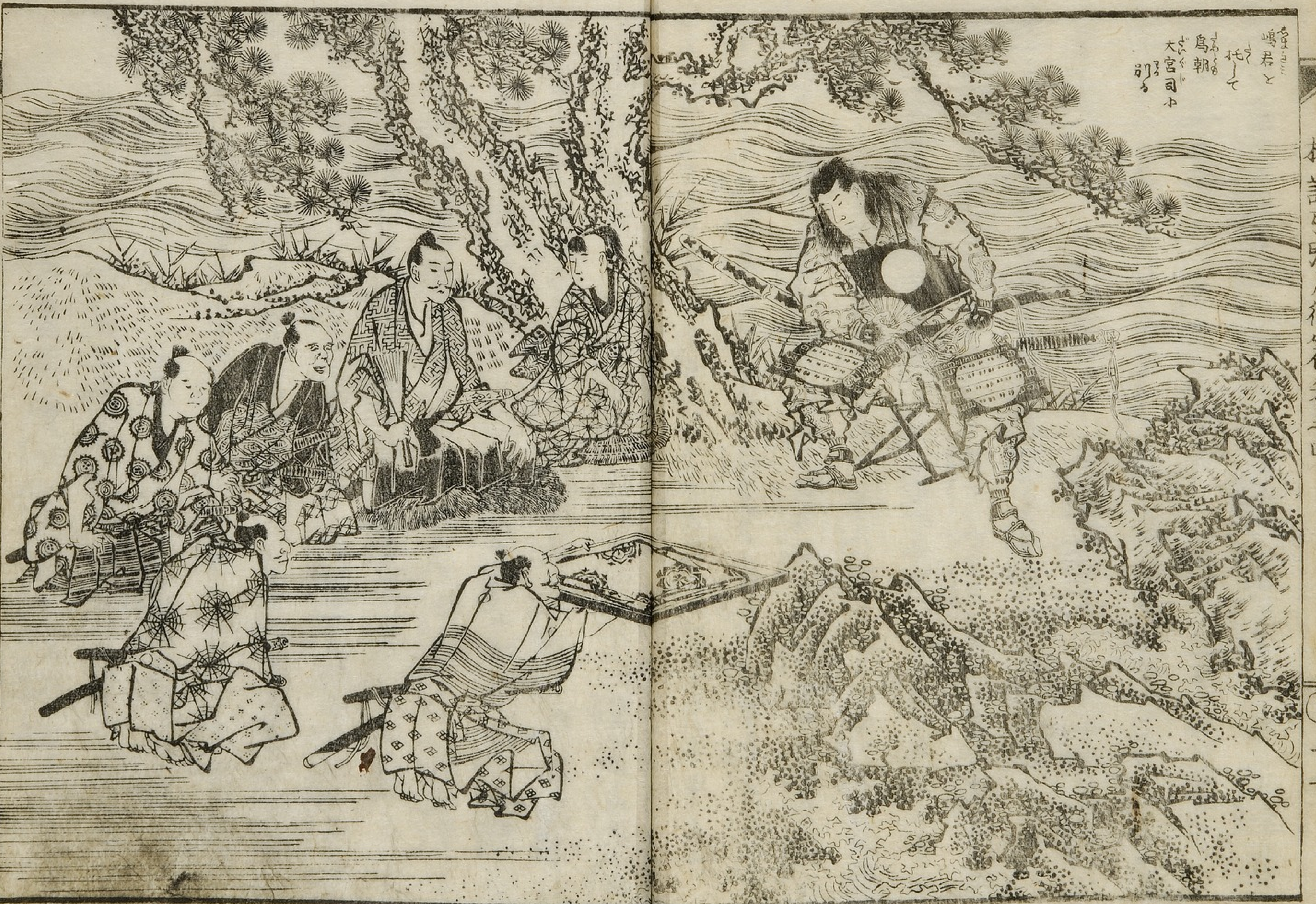
なれば。人の饗應を受るとしよろこぶべけれ。まづ痍負を勦りまへにしく宣へぞ。彼人はげにもと點頭つゝ。恙なき家隷に仰て。血を拭ひ。薬を与へ。又みづからも展撿して。さらに勦れども。傷られたるものどもゝ。酒氣を帯るによりて。鮮血とゞ夥しく出られ。痍をおひの外に浅かりしかば。主從ひとしく歡び。みなこれ勇士の賜なりかし。再生の恩澤を蒙りながら。いかでか一言の禮謝を述ざるべけれ。まげてとまりへ入らしまへとて。主人みづから燈燭を秉て。なし舩館に誘引つ。つく〴〵とうち瞻て大に奇み。其許はいかなれば四月下旬大嶋にて討死したまひぬと聞えられ。八郎御曹司にはあらずやといふ。為朝も又熟りて。はじめて燈の光に主人の面をみてうち驚き。實御辺こそ。かの兄義朝の舅なりける。熱田大宮司藤季範ぬしにてありけり。そも何の故に。かゝるところへは来ましけると問たまへば。大宮司答ふらく。

しらるゝごとく。尾張は源家代々の采地なれば。某いぬる保延のはじめ。熱田の祠官に補られしも。讃岐院の御恩にして。併古判官殿の吹挙によれり。されば一とせ白峯の御墓に詣て。君恩を謝しまつらばやと思ひながら。社務に遑なければ。心ならずもいたづらに。數の年をすごせしが。この秋やうやく休暇を得て。猛に思ひたち。船路よりこゝに到着て。さきに御墓へ参詣し侍れば。さればこそ多年の宿望足りて。翌は纜を解んとおもふ折しも。不思議の賊難にあふて。いと危かりしかど。からくも御曹司の助成によりて。主從恙なきのみならず。逢日の浦の名にし負て。かくも奇しき對面ぞ。いまだその是非をしらねど。此度召具しられしものどもは。みな腹心の家隷なれば。よしや明白に名告まふとも。絶て洩ることはあらじ。願くは審に縁故をしらしめ玉へといふ。為朝聞て。まづ主の恙なきを祝し。さて宣ふやう。為朝苟も保元の合

戦に。父に伴れ。君に招れたり。百戦百勝の計策を献れといへども。御運の傾くところ。竟に用ひられず。君は荒磯にうつされ給ひ。親胞は弟をとも討れて。おのれはひとり海東に謫せらる。十年に及び。近曽工藤茂光が讒奏によつて。忽地誅罰を加られ。帰らば犯せし罪なきよしを訴んとせしかども勅勘の悲しさ。それも称ならず。所詮妻孥を刺殺し。後やすく自害せばやとおもひ定けるに。側室簓江。家隷鬼夜又ヶ郎等の計略に出し抜かれて。されども彼処を退で。嫡男為頼をはじめ。簓江鬼夜又等を却て自害なさく失なりき。後におそく臍を噬とも。そのかひあるべうもあらねば。とても死後をとまれ身の。讃岐国へ押渡り。新院の御墓を首として腹を切らんものとおもひて。万里の風波を凌で。からうじて来けるなり。とわがりて嶋君を伴つる。又長女小産しなれ。太郎丸二郎丸のみなど。おちもなく説なしたまふぞ大宮司も聞る毎に嗟嘆して。猛に小舩をおろさし。家隷を為朝のむかへに遣して嶋君を迎まゐらし。父子ともに押ならべて。酒食をすゝめ。又為朝に對ていふやう。尾州熱田の大宮司は。尾張氏代々相續せしが。父藤原季兼尾張負職が女児を娶て。おのれ季範をせり。かくて新院（崇徳）御位をすべりしけれど。季範はじめて祠官に補せられて。今日に至れり。されば古左典厩（義朝）はもとの婿舅の好ある人なりなのら。彼人も平治の兵乱に討れつ。為義の子息今は残て世に在さじとおもひければ。幸にして。八郎ぬしのみ残りまへり。わが家大職冠の末葉也といへども。従来源家に由緒あり。もし許し給はゞ。某らが嶋君を養ひて子とし。又わが嫡孫犬稚丸を進らせて。御曹司の後とし。成長の後婚姻さしなば。御曹司の子孫尾陽に繁昌せん歟。まげて自殺をおもひとゞまり給へ。熱田へ伴ひすゝめざしといふも果さず。為朝忽地氣色変り。元を喪ることを忘れざれを

勇士の本意なり。それ誰が為に命を惜む。其許を煩すべき。しかハわれ人の親としてハ慈ふかゝれとしらするに。女児を殺さんハ已ことを得ざれのミ。をしそれを捐あらハぞ。嶋君を進らすべし。とかくも養育くあられかし。しかれど為朝ハさ人体んと宣ふ。是非に及ずて。この処に自殺して。つゞ平生の志をとらし給ひなんといひもあへで。刀の鞘に手をかけ給へバ。大宮司とみに押とゞめつゝ。それ慍り尾陽へ伴ひ進らせよとあるゝハ。ぬるさび儀さらべからず。嶋君ハいまより李範が女児なり。犬稚丸ハ曹司の子なり。この一條ハ努ゝ相違あるべからずと盟ひ。遂に更めて嶋君と父子の勧盃をいたし。又犬稚丸ハ代て為朝の盃を清受。家隷に仰て一襲の衣服と。烏帽子直垂上下などとりそえ。これを為朝に贈りていふやう。これハ李範が祠官に補せられしとき。これを祝ひて。古判官為義のあたへたるを。今に秘蔵して。晴の日ならでハかつて着用せざりき。されバ

よろし。此度も賚したりて。とくにあり。今犬稚が聟引出にこれを進らすべし。着用あらハ院の御墓に詣なんずやと信ぶらちてさし出せバ。為朝恭しく受て押戴て軍中劇あらて。嶋を出し給ふに。これ准備をなし。戎衣母して御墓へ詣んものぞと。心みてわりけれに時よそろへたるにハ。これに引出ものやある。寔にこの烏帽子直垂なれバ。亡父にあふこゝちぞとて。頻に懐舊に堪ずぞ。さくしありて猛に敵をあふなか。けよ嶋君。父を遠あそきなれ。白峯にかへり雲とゝもに自害して失るぞかし。御身今より李範ぬしが父と頼みて孝を竭し。成人の後ハ。犬稚丸の妻となりたまハヾ。貞操を守まるべからず。今生の對面これかぎりなりと笑へたまふに。嶋君いらふかなしさに。涙のそゝぎ落てたちくしくも應あらぞ。大宮司主従も父子の心中を猜して。さまくにいひとしらへまるに。遠寺の鐘声幽に音ずれ。星の光も曉ちかし。さらバとて分く別れ



嶋君と托して爲朝大宮司に別る

とて。為朝を忙しく。彼衣服をとりて袱に裹ミ。郷士の假初に旅立せ打扮てこれを脊負せ。大宮司主従に別を告げ。かさらに浦曲にのぼりゆくぞ。紅の中なる主従は慨然として目送りつ。為朝は嶋君の阿と泣声だにせさせて。中足に信せて走りける。かくて大宮司はその黎明に覚を解し。日数経て尾張の熱田へ帰りしが。家隷等に口を鉗て。為朝のゆくへをいはせず。別れしその日を彼人の亡日なりと思ひしかバ。仏事追善潜かにものして。為朝の菩提を吊ひ。嶋君を愛慈みて養育ほどに。駿の春秋を経て。嶋君十六歳。犬雉十八歳となる年の正月に婚姻なせり。婿して為朝の後と定め。犬雉丸を更て。源義實と名告らせけり。義實壯年に及ぶ。上西門院の判官代に補せられ。夫婦睦しくて子ども二人を儲け。嫡子義信。又上西門院の判官代に補せられ。二男義直と云左衛門尉に補せられ。その兄弟の子孫駿あり。今もなほ賛せず。或説に張府の南太渡村に。為朝塚と呼ぶ処あり。その地閻森に。為朝の禿倉あり今も八幡と稱されよしなり。おもふに判官義實その父為朝の墳墓を太渡に築きて。又その霊を閻森に祀られにや。家譜にハ義實を為朝の実子とせり。嶋君のうへ。この末に話るべし

第九十五回

壯士人を知て割符をあふ
八郎死を決して霊墳に詣

為朝ハその旦大宮司季範等にわかれて。ゆくといまだ二三里に及ばぬ。天そらのくも明なりければ。人に見えじとて径に入り。中松山を過りて多度と阿野郡の堺に出むとしつゝ。踏ゆく人の稀なりければ。夕ハ夜逢日の浦にて駿の賊なる只一人にて剰留られ。旅客ありといへ実に欲世にハ稀有なれ。剛者もなれにあふぜとへつゝるまよとをりして。そのゆく先

又この風声せざれバのりしとハいへども佇やゐうれとおぼしてなほ只管に走りまはしかバ。秋の日影も没えてけふ白峯の御墓にまうりえずねそのころ年齢九二三りくおばしき旅客としなく行めひて為朝を熟〲と見かゝり。あやしと呼とゞめていふやう。言卒尓なれども御辺の為体をみるに身丈の高かなる腕の骨の太かなる。手力雄命めきたり。倘昨夕逢日の浦なる。駿の賊を打殺しまゐれ人ハあなたなりや。と問ふに為朝ハ笑て愁に隠して。只あしうりなんとおぼしつゝ何ごとぞ。それこそその人なれと答る人ぞ壮佼されバこそ。はたおもひに違ざりけれとて只管称讃し御辺ハ青雲に志あらばこの割符をもちて。肥後國益城郡木原山に赴て尋まゐらせ。まず主ハ勇士を愛しまふなれバかならず重く用ひらるべし。彼木原山ハ阿蘇よりは末申に當りて去こと十二三里なり。四方郊野にして。獨立の高峯なれど

尋ゆかひまふすハあれべうたどと信なうに說示し。やがて懐中より一隻の割符をとり出して遮与ふ。為朝ハ意中に冷咲ひ。かの壮佼が人を知るの怜悧に愛て。何不件の割符を受おさめて。又あなごとく薄命にして父あくがれ東西南北とさすらへども。いまだ明主に遇ず。ゑじくぶなれるもめぐハ其許の汲引を頼まほうにうり。と回答すれバ壮佼大に歓びて。叮嚀に再會が契りつゝ。やがて袂をわかちけり。かくて其の日も暮なんとすれバ。行かたぞ群鴉星を負て。茂林に帰り。樵夫月が戴く。家路ふ急ぐ。喞ごとに虫の音に。葉末の露ぞ濃なりける。既に人迹絶たれバ為朝ハ只ひとり木のもとに立寄て衣服を更や御墓に詣てつれバ。千草ハ一叢の煙を残して。玉殿燈なく。秋螢を五更の夜を照して。荊棘路が塞ぎて。百石城や百官の紫の袖が汚。朝政が一食され十善の君として。過世の悪業ハ脱まれに青塚苔滑はして

白楊風に戰ぐ。旅魂幽冥今何処にか呻吟し給ふらん。げに人界の冨貴は夢の中なる快樂にして。妻子珍宝及王位も。身死しては伴侶すべからず。さればとく。三界の火宅を出て。永く九品の浄刹に至らんこそ。なほ容易にあらざりけり。これを見て彼をおもふにも。わが身の果は数ならで。不覚に涙ぞ先だちける。折しもさし入る月光に。御廟の柱を向上に。二首の哥を書けり。

山家集

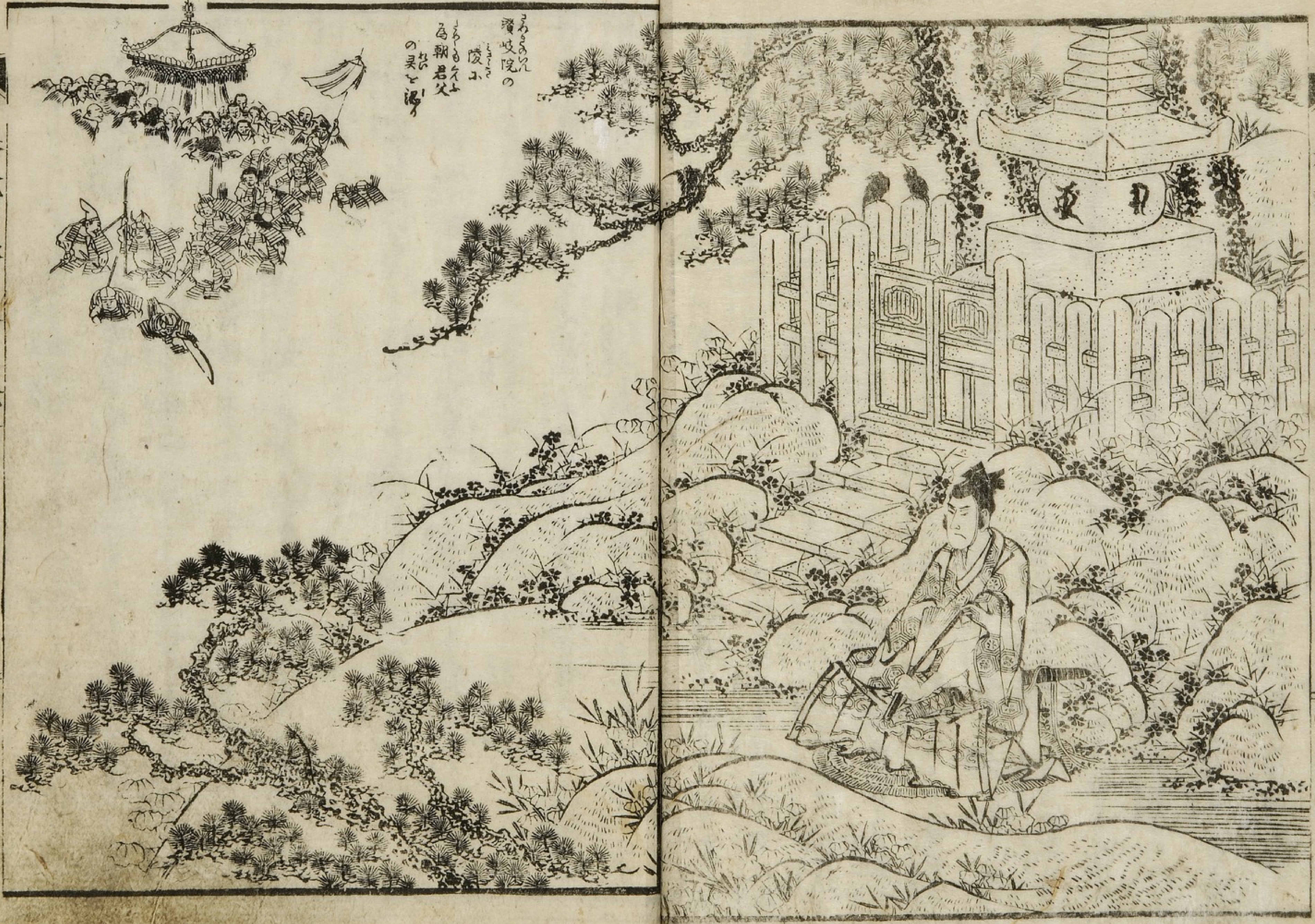
讃岐に詣て。松山の津と申ところにて。新院おはしましけん。御跡を尋しに。かたもなかりしかば。

松山の浪にながれて来し船のやがて空しくなりにけるかな

白峯と申ける所の御墓に参りて

よしや君むかしの玉の床とてもかからん後を何にかはせん

仁安三年十月日。圓位とあり。さては西行法師も。去年の冬ここへ参りけんと思ひつゝ。石の玉垣の斜なる扉を押開きて蹲踞し。さて申すやう。君十善万乗の聖主として。錦帳を北闕の月に耀しましゝも。今は懐土望郷の魂玉體を南海の俗に混じ。露を拂て御迹を尋ぬれば。秋草泣て涙を洗ぎ。嵐に向て君が墓を問ば。老檜悲て。心を傷しむ。佛儀は見えずして只朝雲夕月を見るのみ。法音は聞えずして只松響鳥語を聞く。軒傾きて暁風寒く。夢破て夜雨防がたし。昔今の御有様。いと痛ましくも浅ましく思ひ奉れど。微臣が孤忠を述るに由なく。既に勢竭力究て。今生の誠忠を訴後世の苦楽を共にし奉り。君に強顔りけるものどもが。とく〳〵とり殺さばやとおもふのみ。しかれども大嶋をのがれ来て。尊霊を驚しまゐるのみとすちて。涙を潸然と落しつゝ。やがて氷なす短刀を抜て腹に突たてんとするに。怪しきかな手足忽地に離麻ていかにともすべなし。時に児が嶽の方



讃岐院の陵に為朝君父の寃を訴ふ

小叢雲さそ引て。月ハ半面を顯しみかゝる影いと暗く。電間なく閃めく。御墓の中に散徹し。山下風のいと凄じきに。吹ちる木の葉が紛ふまでに武者四五十騎前駈して生茂りし叢に腰輿を舁すゑ。そのハごとくて象の鼻。鳶の嘴にて。左右の腋に翅生たり。こハ怪しとみれバほどなく。御輿を墳のほとりに扛居しが。武士ハ二帯に列を整て跪踞し。警蹕の声とゝもに。御輿の中より玉音高く。

朝倉を只いたづらにかへすにも釣する海士の音をぞ泣るれ

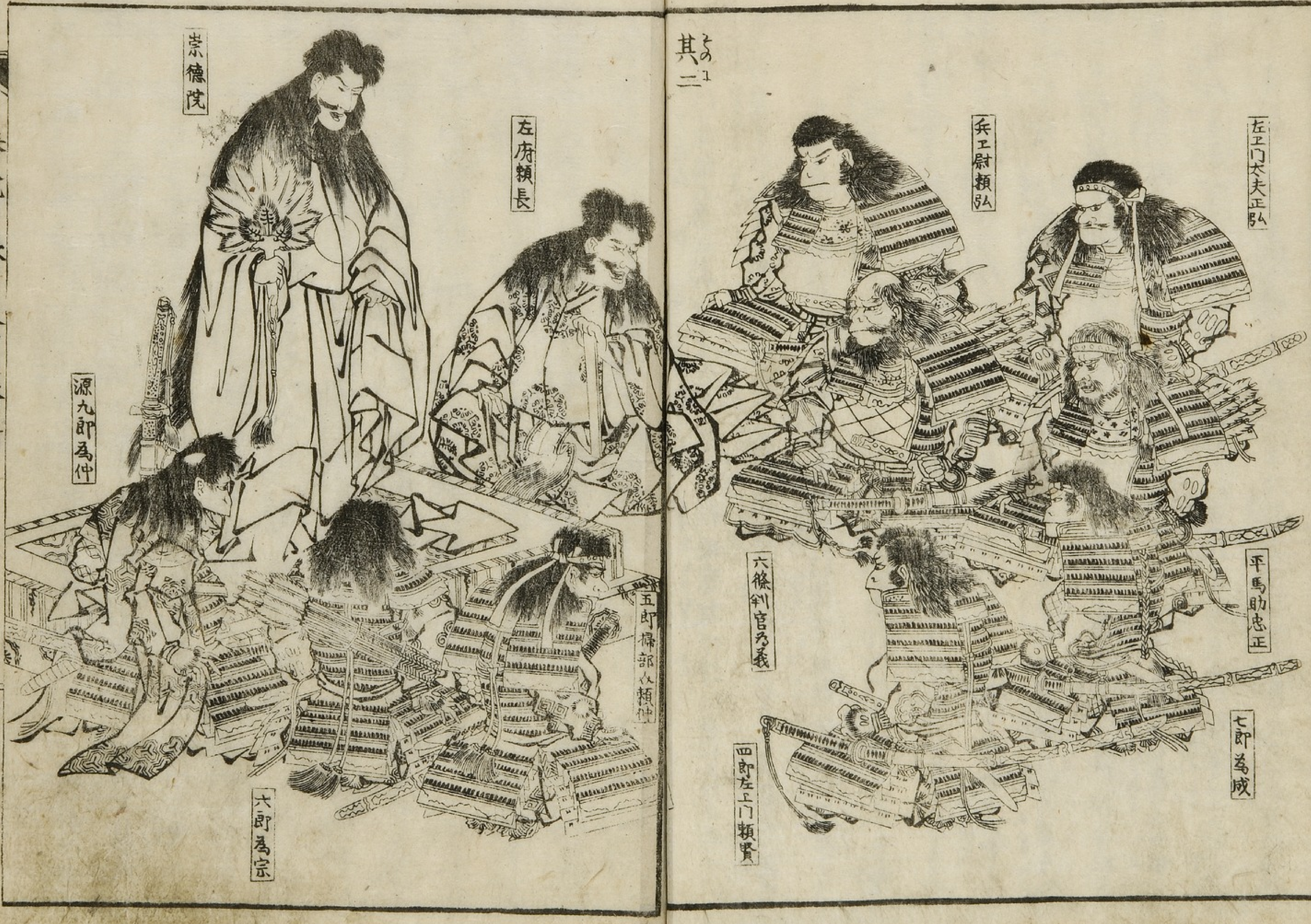
と一首の御歌に號せさせ給ふありたちて。設の帳に着せ給へれば。新院此世に在しかれ日の面影に露違ハせまさねど。只よりハ窶まさりこれにこそ。随從まつれ徒をみれバ。玉座の傍に侍るハ。左大臣頼長公以下。下野判官正弘ぞの子右衛門大夫頼弘にまで至るまで。九六人嚴くならび。六條判官為義

その子左衛門尉頼賢。掃部介頼仲。加茂六郎為宗。源七郎為成。源九郎為仲。父子六人。次に平馬助忠正。その子院藏人長盛。次男皇后宮侍長忠綱。三男左大臣勾當正綱。四男平九郎通正。次に村上判官代基國をはじめとして。一人當千の兵士九四人。おの〳〵白地の錦の鎧直垂に。質木の弓かい挾ミ白羽の征矢を負られが。怒る面にあふれて。いとおどろ〳〵しく。吻息焔となりつて草の葉末を照せり。為朝ハ遠ざかるさに踞りて。父為義をはじめとして。それ〴〵にありし世の面影に異ならねど。鬢の霜さへ降そえて。擾乱しく後髪ハ銀の針のごとく。額の皺ハ三の浦ふうち寄る浪より繁かれども。猛き武者態にて。長絹の直垂に。白糸威の鎧着て。恩賜の御劍鶴丸を帯られたるも。卑も賢を愚なれども。親子の恩愛疎かるべきにあらねど。ぞ為朝ハこゝといへまそらきぬいそづらに。玉床近かれバ畏みて名告も遂

實父もこれをバしらざりけん。ころさがへうつれる身なりけり。そのうへ左府頼長左右が信とえらして。さても御敵義朝をバ君が在世の日に誅しあひつぎ。なほ憎しとおぼし伊勢平氏等をいつくしみして久滅をとぐれおのく謀ちがふぞなくまゐりしかへめげのへと宣されバ。為義忠正が輩もにやくゐら清盛駑才の小人なれども。過世よくて官禄人臣の上を究め一族こぞる朝恩に浴あまつさへ暴虐無道なり天その驕りを憎むと見えし。しかハあれ重盛徳行乃賢芳しく忠にして孝なりかりて外その勢を禦ぐ平家の[illegible]滅亡せざれぞ重盛あればなり。遮莫彼が命数今より後。十年の外を出ず且くまちしまへおのづから便宜をうるれの日あるべしとやス新院これを聞食て朕が憎しとおもふもの。豈清盛のこそなからんや。重盛ぐに世になくバ雅仁（後白河院時に太上天皇）を物ををしらせ年来の鬱憤が散して清盛元来君臣の礼を忘るゝされバ彼に雅仁が恨して鳥羽の離宮へ押籠さし大政大臣以下。四五十人の官職が止や。関白が太宰権帥に遷さしめバ。忽地人望に違て。稀代の珍事ぞ耳なんその時為義を先陣とし忠正ハ後陣がしらとし。法住寺殿（後白河乃御所）の西れ門より入とすれ彼君臣からの讃岐の浦に押引はして。海ゟ沈まるべしぞと仰されバ為義かしこまつて申すやう。法住寺殿の門くハ不動明王大威徳の固なるになれバそのよしとても入りがたからんといひふにせさせなふにうとやス。しからバ清盛が西八條の亭へ渡御あれかしとこそ仰られバ衆皆その議にしたがふべし。今ハ只十年が程ありて思ひしらしめんものをと回答まうすれバ。新院うち咲ましひて。既に怨敵誅罰の事ハ定めつれどもぞ忠臣の子孫に勸賞せざ朕が爲に命を隕せしもの一人としてうち捨ておかじあらねど就中為義ぞ嫡子義朝に引されて殺の子どもをわくしありしに。

何の日にか忘れつべき痛ましき幼少のものどもも。みな保元に首を刎られて今は只八郎為朝のみ生残れり。されば彼を六十餘州の總追捕使にせまく思しけれど。いかにせん義朝が子。頼朝が久後の武運洪大にして天既にこれに許せしかば。朕が神力にも及びがたし。こゝに為朝が二男朝稚丸は足利義康密に養ひとりて。今見よ下野にあり。これが子孫をもて天下の武将と仰がし又為朝が末生の末子をもて某の國の君となさんとす。これ朕が贔屓の制度にあらず。為朝夫妻家隷等が忠義の善報その餘慶子孫に及ぶものにして自然の理なり。又は頼朝一旦武運秀でゝ平家を追討し。賞罰その手に出づといへども。これが親の義朝が父を弑その悪報その餘殃子孫に係り。頼朝兄弟不和にして。有功の弟を殺し。父子三代僅に四十年にして自滅せん。これも其躰をとゞめ死骸もえざる改元の年に死をまねく験とならん。夫善に

かゝれば善報あり。悪にかゝれば悪報あり。輪廻應報の損ゆゑなきにあらず。鬼神豈人に私せんや。しかるを為朝世を恨み刃をとりなくて自殺して失んといふとてる。究てしられべからず。今茲冬の半に至りて肥後國に赴くべし。そうらざして故にあひ。年来の艱苦をかたり慰る日ぞあれ。つれあるといへども命運なる事全からば。ふたゝび合してふたゝび離れその徒はなさ非命に死をとげたる多からん。これ忠義の為といへど又年来為朝が夥の敵を射殺したる。その報とおもはゞ。総て恨むるに足らずや。世の常言に苦中の苦を喫し盡て方に人の上の人となれとしといへり。事迫りて死を軽んずるは日本だましひなれど多くは愚の淵に似て学ばざるの悞なりけれ。あらねなど宜へば。為義は世にも辱られ給ふ事多かく。愚臣が子ども夥なる中に。為朝その智勇兄にも弟にも勝れば。すぐれていと惜しく思ひけるに。彼が子孫かく莫大の果報あらんべ


其（その）二
左ヱ门大夫正弘
兵ヱ尉頼弘
平馬助忠正
六條判官為義
七郎為成
四郎左ヱ门頼賢
五郎掃部助頼仲
左府頼長
崇徳院
源九郎為仲
六郎為宗

歓びこれに酒をとらせし。是亦君の恩恵にこそと謝しやせしが。陪従の輩も又歓びて述正弘頼弘御配に候ひて御盃を勧めまゐらすれば。新院こゝろよく喫し食ぐ。やがて群臣に賜ふ。頼長以下次第にこれを巡らして。おのおの喫するところに。新院をはじめまゐらせ。頼長公。為義朝臣以下の群臣。身の中より猛火もえ出。阿と叫ぶ程こそあれ合して一團の燐火となり。金光を發つて児が嶽を投して飛去りぬ。これや此天狗道の苦艱かと。こゝろしぞ南柯の一夢にて為朝は。御前に短刀を抜かけられ儘。石の玉垣にありけれ。それにもあらで世せしが。夢覚えて歎息し。折しも雲間を啼わたる。初雁が音をうち仰ぎ。月いかゝ雲かくれて。雨蕭々と降出しけり。さては夢ならずありけれ。君と父と夢中に霊をあらはして後事を示し。自害をとゞめ給ふなることぞ。かゝれば俳ともし死をとぐるにあらじ。且新院腰輿の内より笑えましたまひし御製に

〽朝倉や只いたづらにかへすにも。釣する海士の音こそ泣かれと詠ぜし御歌のこゝろを思ふに。朝倉は筑前國上坐郡にあり。齋明天皇。朝倉の宮にまします。彼処にて崩たまひし。これは新院もこの荒磯にて崩たまへば。直に朝倉の木の丸殿にたとへしこゝにまゐる為朝を。いたづらにかへしては本意にあらねばと御霊のあらはれて。三十一字に示したまふにこそ。ちよなれ面目かれとて。感謝の涙を拭ひつ。通宵御墓に候じ。さて天も明なんとすれば。

朝倉や木の丸殿に入るひは君にしられてかへられしさ

かく讀て手向奉り。やがて松山に退れて。あだし彼山中に身を潜じ。遂に示現をまちしが。その年冬の半に至りて山を出。肥後國へぞ赴きける。按ずるに。朝倉や木の丸殿云々これは伶人浮跡が是成入道蓮如（一説に蓮如は小河侍従隆房が法名とも云不詳）がうたに似たり。下の句少し違へり。これは為朝不圖蓮如がよみをおもひよして。かく

口號なふなれたりし。されバこの夜爲朝のゆめみたまひしに違はず。その後洛にかへらず。怪異ありし也。是讃岐院の祟なりとて。治承元年六月二十九日追號ありて崇德院とぞまうされ。箇樣に宥進らせられども。なほ御憤ふかくてやありけん。同三年八月朔日に。小松大臣重盛逝去し。清盛いよいよ暴惡を放にせし。遂に物狂しくなりて。種々の怪癡ありけり。これも又崇德院の御靈とし平家滅て後いよいよ宥進らせんためにむかし御合戰ありし。大炊御門が末の御所の迹に。社を造りて祝奉り。左府賴長公に贈官贈位ありて。太政大臣正一位を贈られ。元暦元年四月十五日のことなりし。されバ平家讃岐の浦に沒落して滅亡するも。全く彼御祟なりと聞くよりいへり。今按ずるに平治元年正月二日。左馬頭義朝朝臣長田が爲に殺され。正治元年正月十三日。右大將賴朝卿薨ぞ。去年（建久九年）十二月。落馬によりて病をうるなり。（東鑑に賴朝薨去のことを載せず。その死の善からざる以由あるならん欤）承久元年正月右大臣實朝公禪師公曉に殺され。父子三代ミな正月に于て薨ぞ。まことに絶焉。ともに改元の年にあり。又足奇とすべし。且義朝ハ野間内海なる長田が家の浴室に害せられ。その後四十四年を歴て。元久元年七月十八日義朝の孫從二位左中將賴家朝臣伊豆國修禪寺の浴室に害せられ。これも又改元の年なり。（東鑑に弑害のよし。將軍譜に曰或ハいふ賴家浴室の中に於て害せらる。近世史實朝刺客をもて殺せらる。）祖孫二世。又その殃を蒙れり。夫はじめ俑をつくるものすら。聖人これが後なきを示せり。況て義朝その父を殺その惡報かくのごとくならざることを得んや。これを以彼をおもふにも。世の童子ホ忠孝なりとも忽にまどふべし。只おそれてもおそれざるべきぞ。自作せる孽也。

椿說弓張月後篇卷之四畢

六拾[illegible]

[illegible]